

20世紀初頭イギリスの大学における試験と教育

—バーミンガム大学初代学長オリバー・ロッジを中心に—

中 村 勝 美*

(2022年11月30日 受理)

The Life and Educational Ideas of Sir Oliver Joseph Lodge, the First Principal of the University of Birmingham: Examinations and Education in Early 20th Century British Universities

Katsumi NAKAMURA*

The granting of a charter to an independent civic university in Birmingham was a momentous event in the history of higher education in Britain. The process by which local university colleges were granted university status tends to focus on the influence of normative institutions such as Oxford and Cambridge.

Sir Oliver Joseph Lodge, a physicist, became the first principal of the new University of Birmingham in 1900 at the invitation of Joseph Chamberlain. Lodge's rise to prominence was quite remarkable for a man without a public school or Oxbridge education, who only began his own higher education at the age of twenty-two. He proved his ability through public examinations and took his academic career into his own hands.

This study examines the idea of education and examinations at the University of Birmingham in the early years in relation to Lodge's educational ideas and experiences.

Keywords: History of British Universities イギリス大学史, Undergraduate education 学士課程教育, Bachelor degree examinations 学士学位試験, Oliver Joseph Lodge オリバー・ロッジ

1. はじめに

19世紀イギリスでは、官僚任用や専門職の入職、大学の学位試験、中等学校、初等学校の教師や生徒を対象とする試験等、社会や学校の至るところで、試験が活用されていた。競争試験は個人の能力を測定し、優秀な成績を修めたものに地位や栄誉を与えることによって、社会を活性化し学力を向上させる手段として信奉される一方、試験のもたらす弊害についても議論が絶えなかった。ことに19世紀末には、「帝国の試験機関」として、教育は行わず学位試験・学位授与のみを行うロンドン大学の在り方に対し、関係する教育機関の教師たちによる改革運動が最高潮に達した。

オリバー・ロッジ (Sir Oliver Joseph Lodge, 1851-1940) はヴィクトリア期を代表する科学者の一人であ

る。苦学してロンドン大学のBSc学位を取得し、物理学において功績をあげ、イギリス最初の市民大学であるバーミンガム大学学長となった。本研究では、バーミンガム大学学長ロッジの経歴に着目しつつ、ロンドン大学から独立し、独自の教育と学位試験をとり行うこととなった新大学で、ロッジがどのような大学教育をめざしていたのを明らかにする。

(1) 19世紀イギリスの大学教育

19世紀半ばまでイングランドには、中世大学として誕生したオックスフォード、ケンブリッジ大学のほか、ダラム大学、ロンドン大学のわずか4大学しか存在しなかった。市民大学 (civic university) と呼ばれる新大学の設立は20世紀を待たねばならなかったが、これは必ずしも19世紀イングランドにおいて高等教育機会が著しく限定されていたということを意味するものではなかった。各地に設置された高等教育機関で学ぶ学生は、名目

* 広島女学院大学人間生活学部児童教育学科教授

上、ロンドン大学の学位試験制度を利用して学位を取得することが可能であった^{注1)}。19世紀自由主義国家イギリスでは、国家が直接、新大学創設に乗り出すことはなく、国家の委託を受けたロンドン大学が大英帝国の試験機関として、試験を実施し学位を認定することによって、学位取得の機会拡大と学位の水準管理が行われてきたといえよう。

一方、ロンドン大学の学位試験制度には、学外試験特有の試験と教育の分離から派生する諸問題も存在した^{注2)}。一つは、筆記試験は人間のもつ能力や達成度のある側面のみを評価するに過ぎないという批判である。

1858年以降、ロンドン大学と提携教育機関との提携関係は解消され、学位試験志願者は提携校における教育証明書を求められることはなくなった。つまり、全くの独学や受験指導コーチによる詰め込みや暗記であっても、試験に合格しさえすれば学位が取得できることになった。このことは、どこでどのような教育を受けたかという過程、すなわち「高等教育の質」が問われないということの意味したのである。

一方、ロンドン大学の学位取得は地方で学ぶ学生にとっても、学生を教育するカレッジにとっても相当の難関であった^{注3)}。合格率から見ると、ロンドン大学の学士学位試験の水準はとりわけ受験者数が増加していく1870年代以降、かなり厳しく設定されていたことが見て取れる。1884年のBA学位試験受験者327名に対して合格者数は177名（合格率54.1%）、同BSc学位試験受験者54名に対して合格者数は27名（同50.0%）であった^{注4)}。

もう一つの批判は、試験がカリキュラムを規定することの弊害である。筆記試験の結果のみで学位が授与されるならば、試験に出題されないことは学ぶ必要がない。さらに、学生を教育する教師がカリキュラムの作成や学生の評価に関与できず、学生や地域のニーズが教育内容に反映されないならば、カリキュラムは画一的で柔軟性を欠くものとなる。

実際に、ロンドン大学の学士課程においては、1836年の学位授与権獲得から1898年ロンドン大学法による改革が実施されるまでの60年余り、1858年BSc学位導入に伴い、最終試験においてサイエンスとアーツが分離された大きな改革を除くと、カリキュラムの大幅な改訂は行われていない。その特徴は古典学から数学、自然科学まで幅広い科目を必修とする一般教育であり、地方の新興高等教育機関の多様な教育ニーズに対応する柔軟性を備えたものではなかった。

こうした問題点に対する批判は19世紀末にかけて次第に高まり、ロンドン大学改革運動や市民大学の大学昇格

運動の原動力となった。

（2）バーミンガム大学の成立

高等教育をめぐるこうした状況の下、イングランドの地方カレッジで初めて、連合制ではなく単独での大学昇格を目指し、学位授与権を獲得した市民大学がバーミンガム大学である^{注5)}。

ここでいう市民大学（civic university）とは、別名「赤レンガ大学（redbrick university）」とも呼ばれ、主として20世紀初頭イングランドの主要産業都市に誕生した大学、バーミンガム大学、マンチェスター大学（1903）、リバプール大学（1903）、リーズ大学（1904）、シェフィールド大学（1905）、ブリストル大学（1909）を指す。オックスフォード大学やケンブリッジ大学が全国から学生を集める「全国区」の大学であるのに対し、市民大学は都市と深く結びつき、地域の学生を教育し、地域の産業に役立つ研究を行い、人材を供給する地方の大学であった。

「赤レンガ大学」とは、ヴィクトリア時代に建造されたこれら大学の建材からイメージされた名称であり、なかでもバーミンガム大学のグレイトホールはその代表例といえる。市民大学は外見だけでなく、その教育理念も旧来の大学とは異なっていた。すなわち、オックスブリッジの教育がリベラルアーツを中心とするエリート主義的なものであったのに対し、市民大学は地方の若者に高等教育機会を提供し、その地方の産業に有為な実用的、専門的教育に注力する傾向があった。

（3）バーミンガム大学初代学長ロッジとは

ドラモンドによると、ロッジは初代学長として、新設されたバーミンガム大学の本質を形成する上で決定的役割を果たしたとされる^{注6)}。彼は、当時のイギリスを代表する科学者の一人であり、物理学に関する主要な団体で担っていた役割やリバプールで教授職を務めた経験は、

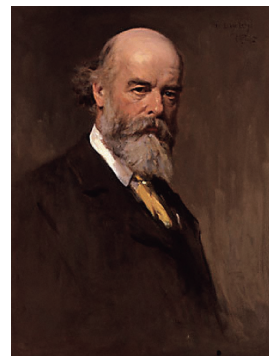


図1 Sir Oliver Joseph Lodge (1851–1940)
(出典：by Sir George Reid, c. 1907 © National Portrait Gallery, London)

「科学カレッジ」として発足し、産業都市にふさわしい大学として歩み始めたバーミンガム大学の学長にふさわしい経歴と言えるだろう。

もちろん、学外から招聘された学長として、大学の実質的な創設者である政治家チェンバレン（Joseph Chamberlain, 1836-1914）や、大学に資金を拠出した地元有力市民、古参の教授たちとの緊張関係は存在したが、新しい大学における科学の位置づけを定め、最終的に科学と他の学問分野との関係を決定したのはロッジであったという。

2. 研究課題の設定

19世紀以降、近代的・実用的学問を志向し新設された中等学校や地方のカレッジが、パブリック・スクールやオックスフォード及びケンブリッジ両大学などの「規範的教育機関」の影響を受け、古典教養主義を受容していく現象は、ウィーナー（1984）¹⁾ のジェントルマン資本主義に代表される文化史論的アプローチから説明されてきた。また、1960年代以降、総合制中等学校の推進を契機として、バーンステイン²⁾ やヤング³⁾ に代表される、カリキュラムに隠された支配階層の権力関係を解明しようとする社会学的研究が蓄積された。カリキュラムの社会学的研究は、社会における知識の階層化と社会的分化が、統治権力や職業構造と同様、カリキュラムにおいても同様に見出されること、支配階層の価値観や利害が再生産されることを明らかにした。

しかしながら、これら研究は学問的カリキュラムと職業的カリキュラムの分断や支配階層の文化の統制的側面を指摘し、現状を批判する有効な視点を切り拓いた一方、学問的カリキュラムの優位性を所与のものとして捉え、なぜ新興中等学校や市民大学がエリート文化である古典教養主義を受容したかについては十分に説明されてきたとは言えない。個々の中等学校や大学の教師がそれらを受容していく過程では、何らかの葛藤や戦略があったはずである。また、オックスブリッジの影響や学問的教科の優位性を過度に強調することは、市民大学や技術カレッジの教育理念とそれらが持つ豊かな実践や多様性を看過することになりかねない。一方、山崎⁴⁾ は、国家が大学昇格及び国庫補助金支給における審査や査察を通じて、市民大学の教育内容やガバナンスを統制し標準化したとして、従来のイングランドにおける大学自治の伝統を相対化する視点を提起している。

本研究は、これら文化史的、制度史的なアプローチによる先行研究に学びつつ、教師のライフヒストリーの研究方法を参照する。教師のライフヒストリーとは、ヤン

グの研究を批判的に継承したグッドソン⁵⁾ が、カリキュラムとは学校内外の様々な社会集団が交渉を繰り返した歴史的過程の所産として成立するとして、教師個人や集団のアイデンティティや経験、利害関心がかれらの実践にどのような制約を与えるかを、教師の生きられた経験を通して洞察するために用いた研究手法である。本稿では、19世紀大学改革と科学教育の勃興期に、それまでのアカデミック・エリートとは異なる過程を経て大学教授となったロッジの教育歴をたどり、彼の大学教育観に与えた影響について考察する。

若き日に叔母から学んだ独自の速記術によりスマイルズの『自助論』を書き写したと言われるロッジは、著名な科学者として、イングランド初の市民大学学長として、新大学でどのような教育を実践しようとしていたのだろうか。

大学史研究の分野においてロッジは、同じ科学者であるハクスリらと比べると、かなりマイナーな存在である。また、後年に心霊研究に傾倒した影響から、学界でもその存在を忘れられつつあった。しかしながら、自らの大学運営だけでなく、科学教育研究振興のため国庫補助金を獲得する運動において、学外でもリーダーシップを発揮した人物でもある。近年、自伝が再版され、新たに評伝^{注7)} が刊行されるなど、ヴィクトリア時代を代表する科学者として、また科学の伝道者として再評価されている。

3. 史料について

本稿では、ロッジの自叙伝、および学長就任に際してロッジが大学の評議会および教職員に「所信表明」として送付した書簡 Letter to the Senate and Staff (July, 1900)^{注8)} を主要史料として、バーミンガム大学における試験と教育の実態をロッジの教育観に焦点をあて明らかにする。

ロッジは1851年に生まれ、1940年に89歳で亡くなった。本研究の主要史料となる自叙伝『過ぎ去りし年月 (Past Years)』^{注9)} は1931年、ロッジが80歳の時に出版されている。自叙伝を歴史史料として扱うには、叙述の正確性や主観性に留意が必要であることはもちろんである。しかしながら、小山^{注10)} が指摘するように、数十年の年月を経て自叙伝に書かれていることは、記憶と選択という二つのフィルターを通過した著者の主観性に貫かれており、それこそが書き手にとっての「事実」であるといえる。つまり、自叙伝には過去の出来事や状況がその人に与えた衝撃や影響を語る力があるのである。

自叙伝執筆の直接の動機は、12人の子どもたちに自ら

の家系や人生について語り伝えることであった。しかし、「まえがき」には「私の若き日の苦闘は、もしかすると若者の興味をひくかもしれない。もちろん、当時と現在ではまったく事情が異なっているけれども」^{注11)}とあるように、当然のことながら一般読者が意識されている。

自叙伝は基本的には時系列に沿ってテーマ別からなる全28章で構成されており、家族や生い立ち、青年期までを取り扱っているのは、1章から6章までである。リバプール時代が13章から16章まで割かれており、物理学研究や大学、心霊主義研究、家族との生活などが描かれる。古典物理学から量子力学への歴史的転換期を生きたロッジが、自らの科学研究について語ったことと、語らなかったこととは何か、興味はつきないが、ここでは主として彼がどのようにして科学者として身を立てたのか、その教育歴を中心に振り返っていこう^{注12)}。

4. ロッジの生涯における教育と試験

(1) ロッジの生涯

ロッジは物理学者として、無線やエックス線技術の基礎となる電磁波の発見に関わるなど、ヴィクトリア期を代表する科学者の一人である。表1は『オックスフォード国民伝記事典』に掲載されたロッジの記事^{注13)}より作成したものである。追悼記事に、「持ち前の優れた話術と印象的なふるまいにより、学会で講演するときはいつも真剣な注目を集めていた」^{注14)}、「講義であれ討論であれ、テーマの本質を自然に、そして鋭い洞察力で提示し、聴衆の心をつかんだ」^{注15)}とあるように、最先端の物理学に関する公開講義や実験で聴衆を魅了し、身長190センチを

超える堂々とした体躯も相まって、学界でも尊敬を集める人物だったことが分かる。

ロッジは、鉄道員で後に商人となったオリバー・ロッジ (Oliver Lodge, 1826-1884) とその妻グレース・ヘース (Grace Heath, 1826-1879) の8男1女の長男として、1851年6月12日にスタッフォードシャー、ペンカルに生まれた。

ロッジの弟、リチャード (Sir Richard Lodge, 1855-1936, グラスゴー大学歴史学教授) と、妹のエレノア (Eleanor Constance Lodge, 1869-1936, 歴史家、レディ・マーガレット・ホール学寮長、ウェストフィールド・カレッジ学長) もまた、輝かしいアカデミックキャリアで知られている。

ロッジは地元のデイル・スクールで学んだのち、8歳の時、生家を離れてシュロップのグラマースクールに進んだ。早くから父親のもとで商いの修業をしていたが、1866年にロイヤル・インスティテュートでティンダル教授の講義を受ける機会を得た。これが科学の道を志す大きな転機になったという。ロンドン大学の入学登録試験に挑戦し、1872年に合格する。1874年まで家業をつづけながらも科学への関心は失われることはなく、あらゆる機会をとらえて科学の講義を受けたり、英国科学振興協会の大会に出席したりしていた。1874年にロンドンのユニバーシティ・カレッジに入学し、1875年24歳のときロンドン大学でBScを取得する。1877年には博士号を取得し、1881年、15人の候補者のなかからユニバーシティ・カレッジ・リバプールの物理学教授に任命された。

1898年には「放射線と物質とエーテルの関係に関する

表1 ロッジ略歴

	年(年齢)	事項
少年時代	1851	スタッフォードシャーで誕生
	1859(8歳)	シュロップシャーのニューポート・グラマー・スクールで学ぶ
	1865(14歳)	父親のビジネスである陶器の卸売業の見習いへ
修業時代	1866(16歳)	ロイヤル・インスティテュートでティンダル教授「熱」の講義を受ける
	1872(21歳)	ロンドン大学 入学登録試験に合格(『過ぎ去りし日々』では1871年)
	1873	王立化学カレッジで科学教師向けの講座を受講
	1874	家業を辞め、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン(UCL)に入学
	1875	BSc取得
リバプール	1876~	ベッドフォード・カレッジ、UCLで教える
	1881(30歳)	リバプール・ユニバーシティ・カレッジの物理学教授に就任
バーミンガム	1898(47歳)	科学者としての黄金期
		ロイヤル・ソサエティより、ラムフォード・メダル授与
	1900(49歳)	バーミンガム大学学長に就任
リタイア後	1919(68歳)	学長辞職
	1931(80歳)	「過ぎ去りし年月」(Past Years)出版
	1940(89歳)	死去

(出典：P. Rowlands, Lodge, Sir Oliver Joseph (1851-1940), DNB, 2004より作成)

研究」を評価され、英国王立協会よりラムフォード・メダルを授与された。1899年には物理学会会長に就任し、1900年にジョゼフ・チェンバレンの招きによりパーミンガム大学の学長となった。1911年からは『哲学雑誌 (*Philosophical Magazine*)』編集者、1913年には英国科学振興協会会長を務めるなど、科学啓蒙家として一般市民にもその名を知られていた^{注16)}。

このように、ロッジが科学の世界で世に知られるようになったことは、「パブリック・スクールやオックスブリッジでの教育を受けず、22歳になって自ら高等教育を開始した人物として、きわめて注目に値する」^{注17)} ことであった。

(2) ロッジの学校生活

ロッジの父母は、いずれも聖職者、教育者の家系出身である。しかし母方の祖父は早くに亡くなり、牧師の大家族の最後尾に生まれたロッジの父親は、十分な学校教育の機会に恵まれず、医者のもとでの徒弟修業、鉄道会社の簿記係を経て、陶器やその原材料を扱う商人として自分の道を切り開いた。ロッジの幼少期、一家の暮らしは裕福とはいえなかった。

ロッジが8歳のとき、母方の叔母の結婚相手がニューポート・グラマースクールの副校長となった縁で、下宿生としてそこに入学できるという話が舞い込んだ。育ち盛りの大家族の長男には願ってもない話で、両親はすぐに承知し、ロッジは生家を離れることになった。

彼は後に、この学校における旧式の教育による体罰、寒く埃っぽい学校の劣悪な環境、クラスメイトのいじめを「私の学校時代は間違いなく、人生で最も退屈でめじめな日々」^{注18)} であったと振り返っている。初日の授業は次のように始まった。

一冊の『イートン・ラテン文法』を渡された。一言一句、ラテン語で書かれており、最初のページを覚えるように言われたが、それが一体何であるのかさえ見当もつかなかった^{注19)}。

ロッジは絶望し、最後には涙ぐんだという。教室では悪さをしたからではなく、文法のミスをしたという理由で鞭打たれた^{注20)}。

11歳からはギリシャ語を学んだ。ロッジは学校の教育について次のように述べている。

その地方のグラマースクールで教えられていた科目は、そこに通う大多数の生徒にとって不適切なものであったに違いない。かれらは他に学校がなく、無料だから来ているにすぎなかった^{注21)}。

1860年代は中等教育改革がようやく緒についたところであったが、この学校は当時よく見られた旧式のグラ

マースクールであったことが窺える。ロッジは古典語のほかに代数幾何を学んだが、幸いなことにそれらは得意科目であった。しかし、古典語は最後まで完全に習得できたとはいえなかったようである^{注22)}。

副校長が聖職録を得てサフォークの牧師館に移ることとなり、ロッジらはその地に移って彼から個人教授を受けることとなった。あるとき牧師夫妻の留守中、牧師の姉妹が留守を預かるためにやって来て、ロッジともう一人の少年があまりにものを知らないことに愕然とし、詩を朗読してくれたことがあった。彼らはすぐに夢中になった。

長い間、ヴァージルやホーマーを読み続けてきた私たちにとって、これが最初の詩との出会いだったと言うのは、いささか不合理な気もする。しかし、私たちはそれを文学として扱ったことはなかった。学校での教育は言語学的な訓練であり、あまりに言語が難解だったため、他のことに目を向ける余裕がなかった。教師たちは文学的なことはあまり知らなかったと思う^{注23)}。

当時の教育のあり方を端的に示すエピソードである。学校生活は幸せとはほど遠かったものの、とにかく彼はラテン語、ギリシャ語さらに代数幾何の初歩的知識を獲得する機会を得たのであり、ここでの学びが後にロンドン大学の入学登録試験で役立つことになった。

(学校時代の：筆者注) これら全ての訓練が役立ったと気づいたのは、19歳くらいのときにロンドン大学の入学登録試験を受けてみようと思ったときである。選択科目はなし。ラテン語とギリシャ語両方、それに外国語の一つが必修科目で、他にも国語、イングランドの歴史・地理、代数、幾何、自然哲学、化学。それに3つの外国語について、それぞれ2つの試験があった。当時、私は仕事の合間を縫って独学していたので、これらの科目を手助けなしにこなすのは、冗談ではなく大変だった^{注24)}。

ロンドン大学の学位試験は、入学登録試験、第一学位試験(中間試験)、第二学位試験(最終試験)の3段階からなっており、すべてに合格すると学士課程学位(BAまたはBSc)が取得できた。最初の関門である、ロンドン大学入学登録試験は地方都市でも受験可能で、中等学校修了試験としても広く利用されていたが、科目数が多く同種の試験のなかでは最難関として知られていた。14歳で学校を離れたロッジが独学で合格するには、かなりの努力を要したことは想像に難くない。

この試験には指定テキスト(ホメロスの9巻、キケロ弁論集2巻)があり、私はこれをどちらかと言え

ば古風な方法でやり遂げた。(中略)文法はかなり完璧に仕上げ、幾何は徹底的に勉強し直した。自然哲学と化学には何の問題もなかった。イギリス史は真剣に『学生版ヒューム』を読み、とりわけイギリス国内で戦われた全ての戦いの年号を暗記し、その他多くの大掛かりな記憶の訓練を行なって、そのうちいくつかは試験で披露することができた。一番困ったのは国語で、どう取り組めばいいのか見当もつかなかった。アンガス博士の本を読んだが、必要以上に完全な内容だった。その後、もっと簡単なアダムスの教科書を見つけたが、試験にはこれで十分だった^{注25)}。

ロッジは「濡れタオルを頭に巻いて眠れないようにして、しばしば夜遅くまで勉強に励み」、結果的には一度目の挑戦で見事合格、ファーストクラスを取得した。この結果についてロッジは、「この結果には感謝している。というのも、これは私がこれまで受けたなかで最も難しい試験だったからである。今では、この試験はもっと簡単になり、選択科目も導入されている」^{注26)}と述べている。

科学の道に進んだロッジであるが、「わずかばかりではあるが、古典語を学ぶために費やした時間に、後悔はない。というのは、心霊研究において、マイヤーズやガーニーのような学者と付き合うようになったとき、大いに役立ったからである。(中略)私の時代の相応の人物がすべからく秀でている学問といえば、古典学であった。私ももっと学んでおきたかった」^{注27)}と述懐している。

学位試験で役に立ったという実利的理由とは別に、彼自身の興味関心が広がり、英国科学振興協会や王立協会に関与し、大学教授から学長へと社会的地位が向上するに伴い、当時の一流の人物との交際が増え、共通文化としての古典学的教養の価値を認識したことが窺える。

(3) 家業と科学の間で

ロッジの父親は叩き上げの人物であり、長男の将来については次のように考えていた。

父は陶器商を立ち上げたことを誇りに思っており、私にそれを継がせようとしていた。当時はよくあったことだが、彼は14歳でその世界に入り、見習いから始めて、全ての工程を経験しなければ、ビジネスの世界ではものにならないという信念を持っていた。そこで私は学校から、いや牧師館での個別指導から離れ、父と一緒に製陶所を周り、事務所で働き、簡単な帳簿をつけるようになった^{注28)}。

1865年、14歳になったロッジは父が腕を痛めたことをきっかけに学業を辞め、家業の見習いを始めた。この頃、父親の事業は拡大し、事務所を構え、母親も帳簿の

管理を担当していた。母を愛していたロッジは家族とともに働くことに表立って不満を表明しなかったが、14歳から22歳くらいまでの「もっとも重要な」7年間を家業に費やすことになった。「叔母が訪ねてきて、私を気にかけてくれなかったら、私はこのままだったかもしれない」^{注29)}とロッジは回想している。

1866年、母方の叔母アン(Charlotte Anne Heath)がロンドンで一冬を過ごすようロッジ少年を自宅に招待してくれた。そこでロッジは、のちにマンチェスター主教となるムーアハウス(James Moorhouse, 1826-1915)と知己を得、彼や叔母から講義を受け本を読むよう励まされ、王立化学カレッジやキングズ・カレッジの聴講生として化学や地質学を学び始めた。キングズ・カレッジの教授から偶然、ファラデーのろうそくの科学で知られるロイヤル・インスティテュートで金曜夜に開かれる公開講義のチケットを譲ってもらい、当時の所長であったティンダル(John Tyndall, 1820-1893)の「熱」に関する講義を受ける機会を得た。ロッジは衝撃を受け、文字通り「熱」に浮かされたように科学の道を志すようになったのである。

その講義はまさに目から鱗であった。物理学に初めて触れた私は、貪欲にそれを吸収した。講義は大変賑わっていて、見事なものであり、数多くの実験により解説された。(中略)私は大量のメモを取り、後でそれを書き出し、まるで空中散歩をしているかのように、ロンドンの街を歩いてフィッツロイ・スクエアに戻った。ティンダル教授は私のヒーローの一人となり、それ以来、ロイヤル・インスティテュートで講義が開催される金曜夜には、誰彼構わず説き伏せてチケットを買ってもらい、毎回出席するようになった。6回の連続講義が終わる頃には、私は熱というテーマをかなり習得したような馬鹿げた錯覚に陥っていた^{注30)}。

冬が終わり、再び帳簿をつけ、製陶所へ集金に回る日々に戻ったのであるが、今や彼は科学に目覚め、知識を渴望していた。ロッジは雑誌を購読して自宅で実験をしたり、牧師からティンダルの著書『音』をもらったりと、あらゆる機会を活用して学び続けた。当時、科学技芸局がイングランド各地で科学教育振興のため、クラスを開設していた。ロッジはウェッジウッド・インスティテュート^{注31)}で開設されたそうしたクラスに参加し、年に一度行われる試験を受けた結果、8科目で一等賞を獲得し表彰を受けたのである^{注32)}。このことがきっかけとなり、ロッジは科学技芸局が科学教師の資質向上のために計画した講座を王立化学カレッジで受講する機会を得

た。ロッジの父は科学というものに対し、将来的なキャリアにつながる見込みはないと懐疑的であったが、渋々ながらこのロンドン行きを承知した^{注33)}。

1872年の冬、ロッジは再びロンドンの叔母の元に滞在し、王立化学カレッジでハクスリをはじめとする教授陣の講義を受け、実験室に配属されて科学実験や分析の基礎を学んだ。最終試験では化学で最優秀、実験でも好成績を修めたことから、年俸200ポンドの科学教師として教授から推薦を受けたほどであった。この話を受けることはなかったが、「科学が飯のタネになる」ことに、父親は驚いたという^{注34)}。

ロッジの若き日の回想では一貫して、彼自身がいかに努力し、周囲のアドバイスに忠実に従い、偶然のチャンスを活かして成功を収めたかが強調されている^{注35)}。また、科学を学ぶことに懐疑的で、叩き上げの苦労人である父と、ロッジに学びの機会を与え励ました叔母と母とが彼の置かれた境遇を象徴する存在として対照的に描かれる。その意味において『過ぎ去りし年月』は、自助・独学・勤勉に彩られた成功物語というヴィクトリア期の自伝の伝統に沿っている。ロッジは「試験」を受けて、自己の知性や能力を証明することで学問への道を切り拓いたのである。

(3) 試験により開かれたキャリア

試験について、ロッジは次のように述べている。

私の青春時代はちょうど試験が流行し始めた頃だった。私は全部でかなりの数の試験を受けたが、その科目について理解していれば、試験はわくわくするものである。すれすれで合格するだけでは得るものがあるとは思わないが、多くの場合、私は試験を打ち負かすことができたし、そのことに喜びを感じていた。おそらく、それは自己顕示欲の一種なのかもしれない。全ての人が試験に向いているわけではないが、私には合っていたようだ^{注36)}。

科学技芸局、王立化学カレッジの講座修了時の試験でも好成績をおさめたロッジであったが、その少し前の1872年夏、ほぼ独学で臨んだロンドン大学学位試験の中間試験では、植物学、動物学の試験で不合格となってしまった。1873年の春からは動物学の個人指導教師について学び、ロンドンのユニバーシティ・カレッジで植物学の講義を受けて2度目の学位試験受験に備え、その年の試験ではファーストクラスで合格した。

1873年はロッジの家族にとって重要な年であった。というのも、ロッジの二人の弟、アルフレッドとリチャードがそれぞれオックスフォード大学モードリン・カレッジとペイリオール・カレッジへの奨学金を獲得し大学に進

んだのである。これに触発されたロッジは、自分にもチャンスがあるはずだと考え、「ケンブリッジ大学に行くことに夢中となった」^{注37)}。数学を学びトライポスを受けたいと考えていたロッジであったが、大学要覧を徹底的に研究した結果、出願資格があった自然科学（セント・ジョンズ・カレッジ）の奨学金に応募することになった。結果は不合格であった。

カレッジはサイザーシップをオファーしたが、それは受けず、ロッジは1874年、「数学をもっと徹底的に鍛え上げ、もしケンブリッジに行くことができれば、良い成績を収められるようにしようと決心」^{注38)}し、ロンドンのユニバーシティ・カレッジに進んだ。

ロッジは大学進学を決意した理由の一つとして次のエピソードを紹介している。父親の仕事でイングランド北部リーズに訪れていた際、隣町のブラッドフォードで英国科学振興協会の大会が開催されることを知り、ロッジは滞在予定を延期してそれに参加したいと家族に手紙を書いた。

この頃、私は仕事の合間を縫って、夜間に独学し、ロンドン大学入学登録試験に合格していた。BSc学位の第一試験に進んだところで、物理学でファーストクラスを獲得していた。ちょうど、科学技芸局の許可と支援を受けて、サウスケンジントンの王立化学カレッジで一冬を過ごしたばかりだった。（中略）セクションAで私が熱中しているのを見て、その数学・物理学セクションの座長であるH.J.S.スミス教授が、ある会合の後で私に親切な言葉をかけ、私の数学的知識について質問してきたので、私は自分の無知を恥じ、できることならその一部を正そうと決めたのである。1874年の初め、私は遅ればせながらロンドンのユニバーシティ・カレッジに入学した^{注39)}。

得意としてきた試験での挫折、そしてこの経験は、ロッジにとって独学の限界と、体系的に学ぶことの必要性を実感する出来事だったのであろう。数学だけでなく物理学も学ぼうと考えていたロッジは、ユニバーシティ・カレッジのフォスター教授（George Carey Foster, 1835–1919）と面会した。フォスターはロッジが初歩的な物理学に習熟しているのを見てとり、講義を受けながら、年50ポンドで彼の研究室の実験助手として働かないかと申し出たという。ロッジはこの申し出にとびつき、カムデンタウンに下宿を借り勉学に励むことになった^{注40)}。

大学までは徒歩、質素な食事、日曜は叔母の家で夕食をとって節約と、憧れの大学生活とは程遠いロンドンでの暮らしについて、ロッジは次のように振り返っている。

奇妙な人生だった。私はいわば家族に反抗したのであり、ロンドンへの旅は父の賛同を得られなかった。しかし、私は絶対に成功させるという決意を持ち、休暇も取らず、他の学生たちとも付き合わず、並外れた勤勉さで仕事をした。私は彼らよりも年上で、しかもフォスターとの取り決めで教師のような立場にあったので、これは簡単なことだった^{注41)}。

ロッジは、「遅ればせながら入学し、失われた時間を取り戻すべく猛烈な勢いで勉強した」^{注42)}。その甲斐あって1875年、無事BSc学位を取得し、その後はユニバーシティ・カレッジやベッドフォード・カレッジで教えるようになる。とはいえ、ロンドン大学への進学はほろ苦いものだったことが次のような回想から窺える。

ヘンリック（ユニバーシティ・カレッジの数学教授：筆者注）のもとで、私はドイツ式の勉強をしたが、ケンブリッジで学ばなかったことをいつも後悔している。というのは、ケンブリッジ卒業者ばかりの中で、何とはなく孤立しているからである。ケンブリッジには非常に優れたシステムがあり、素晴らしい教授陣がいた^{注43)}。

これまで見てきたように、ロッジの経歴は19世紀後半の大学教師としては異色である。奨学生として、クライスト・ホスピタル校からベイリオル・カレッジに進んだ弟リチャードとは異なり、オリバー・ロッジは長男として父の事業を継承することを期待されていた。そのため、14歳で学業を辞め、その後は働きながら、パートタイムで学びを継続し、正規学生としてユニバーシティ・カレッジ・ロンドンに進んだのは22歳の時である。

ロッジが生まれた1850年代以降、中等学校試験が普及したこと、ロンドン大学の学位試験が独学者に開放されたこと、ロンドン万博を契機として科学教育の振興が図られ、地方においても科学に関する教育機会が拡充されたことなど、教育や科学をめぐる状況の変化もロッジの自学自習を後押しした。科学技芸局や王立化学カレッジの試験、ロンドン大学学位試験で優れた成績を修めたことは、勤勉さや能力の証明となり、ロッジは自分自身の力で科学者としての一步を踏み出すことができた。

しかしながら、試験での挫折や数学の知識不足から独学の限界を知り、ケンブリッジ大学で学ぶことを熱望するものの、その願いが叶うことはなかった。『過ぎ去りし年月』には、ロッジの自らの努力に対する強い誇りと自負心が表現されている一方で、「正統」のアカデミック・エリートであれば手にできたはずの、人文学的教養やケンブリッジ大学の数学トライボスで優等を獲得する荣誉への切望、これらに対する疎外感が看取される。

5. バーミンガム大学における大学運営

(1) イングランド初の市民大学学長

49歳になったロッジは、実質的な創設者であったジョゼフ・チェンバレンの招きにより、バーミンガム大学の初代学長に就任した。

市民大学学長として、ロッジは多忙を極めた。「市民大学の学長には、いろいろな役割がある。閑職とは程遠い。市民と教授が一体となるようにしなければならない。市民と教授をうまく結びつけていかなければならないし、理事会（カウンスル）で市民の理事たちが教授を市会の職員や役人と同じように考えないようにするのは、少々難しいことだった」^{注44)}と述べているように、バーミンガム市会や有力市民との関係には苦労したようである。

ロッジは自叙伝の中でチェンバレンについてそれほど紙幅を割いていないが、新キャンパスの時計塔建設の経緯については次のように述べている。

チェンバレン氏は、何マイルも先まで見渡せる塔を建て、大学の存在をアピールすることを熱望していた。彼は、旅先でイタリアのシエナの塔に魅了され、この時計塔を建てるために資金を提供してくれる篤志家を説得していた。チェンバレン氏がいなければ、この建物は実現しなかっただろう。政治家というものは、金持ちから大金を引き出すことができるものである。彼は50万ドルを集め、私が「建物だけでは大学とは言えない、目指すべきは人材だ」と諫めると、「いや、今すぐ金を使い、人々に何か見どころを与えれば、残りの50万ドルはすぐに用意できる」と言い放った。理事会はこの計画に難色を示したが、チェンバレン氏がやってきて、その卓越した力ですべてを覆してしまった。そして、反対派を説得し、自分の希望通りに資金を投じるようにした。ここまでは順調で、もしチェンバレン氏が生きていれば、残りの寄付金も間違いなく手に入っただろう。しかし、70歳の誕生日に町を凱旋したときの喜びは、他のすべての仕事に加えて、彼にとって大きすぎた。彼は病に倒れ、やがて大学は初代総長、創設者、そして最高の原動力を失った^{注45)}。

チェンバレンとは意見の相違があり、彼のなき後、ロッジは大学運営においてより指導力を発揮したと思われるが、「最高の原動力」を失った影響は小さくなかった。創設まもない市民大学の財政は、1902年度には485ポンドの黒字を計上したが、1910年度にはおよそ8280ポンドの赤字に陥った^{注46)}。その後も大学は第一次世界大戦に伴う不況から常に資金不足であり、その運営は前途多

難であった。リバプール時代と異なり、大学運営に携わる多忙さから研究の時間は失われ、個人的な不幸も重なったことから、バーミンガムでのロッジの新生活は希望に満ちたものではなかったようである。

(2) ロッジの大学教育観

ロッジは学長就任に際し、評議会や教職員にあてて、彼自身の意見とそれについての批判や助言を得たい事柄について『バーミンガム大学学長より評議会及び教職員への書簡（1900年7月）』と題する文書を送付している。その内容は、主として学位試験に関するものであり、①学位試験の実施方法、②学年暦（学位試験の実施時期）、③学年暦（授業の開始時期）、④副学長の職務、⑤大学の学位とカリキュラムのそれぞれに関する提案から成っている。いずれも、ロンドン大学学位試験委員やリバプールでの教授経験に基づいた専門的、具体的提案となっている。

試験について、ロッジは自叙伝のなかで次のように述べている。

試験ではある種の力が試される。それは全てではないけれども、例えば持っている知識を引き出して使う能力といった、人生で役に立つ力である。そして、試験に向けて準備することは真の努力を必要とする。（中略）現代生活は一種の試験であり、物事を知り、自分の知識で備えなければならない。こうした方向性での若者の訓練は軽視されるべきではない^{注47)}。

ロッジは試験の持つ教育的効果について肯定的であり、試験に備えることがそれ自体、知的訓練になると考えていたようである。しかし、一方で試験がすべてではないとも述べている。

試験ですべての能力が鍛えられるわけではないし、競争社会で発揮される能力もそう多くはない。というのは、試験とは本質的に競争的ではないからである。ウェリントンやネルソンは、現代の要件では陸軍や海軍から排除されたいだろうという人は、間違いなく誇張しすぎである。とはいえ、それは一種類の有能さの試験だけを適用することの危険性を示している。それ相応に、適切な安全装置を用いて使うならば、試験は教育的な強みになりうる。しかし、教育を管理したり、強制的な基準に対応するよう強制したりするために、試験を用いるべきではない。そのような教育は質の悪いものでしかない。試験は、主として、自力で何とかやっていかなければならない無学な学生に刺激を与え、学んだことを試し、うまく行ったら報酬を与えるために用いられる

ものである^{注48)}。

さらにロッジは、難易度が高く、高度な専門的訓練が求められる試験については懐疑的である。

ケンブリッジ大学の数学トライポスのようなハイレベルな試験では、解くために独創性が求められる問題が多く、試験時間に制限もあるため、厳格な要求がなされる。このような要求に応えられるのは、その方面で高度な訓練を受けたごく一部のものだけである。（中略）難問を素早く攻略するための適性が試されることは、確かに有用であるが、その訓練は必然的に特殊なもの、あるいは人為的なものでなければならず、それに特化した経験豊かな個人指導教師にしかできないだろう。私のいう試験とは、このような類のものではない。独創性は必要なく、ただひたすら応用し、自分の頭の中で整理して、それを効果的に引き出すことができればよいのである^{注49)}。

ロッジは、試験とは学生がミスのないよう集中して読んだり、習得した知識を使いこなしたりするための訓練として有用だと考えていたようである。

次に、『書簡』におけるロッジの提案をみてみよう。

試験について、ロッジは採点方法など細部にわたる提案をしているが、ここでは、諮問委員会の設置と試験の実施時期について取り上げる。

ロッジは、「大学の試験の出題は非常に広い影響力を持ち、その地域のほぼすべての教育機関にある程度の影響を及ぼし、しばしば注意深く研究され、実際の教育の改善に間接的につながることもまったくないとはいえない」^{注50)}として、設問の重要性を指摘し、試験に関する諮問委員会の設置を提案している。委員会は、学長、副学長、学部長で構成し、出題、採点を担当する試験委員に助言を行う。これは主として中等教育と接続する入学登録試験を念頭に置いた発言であり、大学が地域の学校に及ぼす影響や初の市民大学として独自に試験を実施することへの注目の大きさを示唆していると考えられる。

次に、学位試験を通常の学期終了時（6月後半）ではなく、新学期開始前（9月後半）に行うことが提案されている。ロッジは、最良の学習法は個人教師の力を借りたとしても、学生が「自分自身で学ぶこと」であるとし、そのための期間を設けるため、またすぐに消えてしまうのではなく真に定着している知識の種類と量を試験するためにも、学期終了後直ちにではなく、休暇が終了した後に試験を行うことが教育的観点から望ましいと述べる^{注51)}。

夏期休暇が詰め込み学習に充てられるのではないかという予想される反論に対し、ロッジは次のように述べて

いる。

最良の問題は、重要な問題についての真の永久的な知識を試すものであって、微細で特殊な点を試すだけの、学者と公言する人だけが興味を持つようなものではない。そのような問題は、記憶にも残らないし何の役にも立たないだろう。広く一般的な特徴というのは、微細な技術的詳細とは対照的に、詰込みでは学べないものである^{注52)}。

このようにロッジは、地域の最高教育機関としての大学が、詰込みでは対応できない確たる知識を問う良問を出題すること、学生は一定時間をかけて試験に備え自学自習することを重視している。自己研鑽と勤勉さは、ロッジにとって終生変わらない信念だったのであろう。

書簡の最後に、ロッジは「もっと難しい問題」として、「大学が授与すべき学位と奨励すべきカリキュラム」について言及している^{注53)}。20世紀初頭、イングランドの大学では、幅広い科目を必修として全学生に課すのではなく、優等学位 (single honour degree) と呼ばれる数学、物理学、歴史学などに専門分化した学士課程プログラムが流行していた。ロッジはこうした他大学の傾向とは正反対に、生きている時代の知識の全体像を学ぶ、一般教育としての「伝統的な BA 学位」復活を主張している。

その内容としては言語、数学、歴史、地理などの定番科目のほか、「今日、教育を受けたと主張する人は皆、生物学の一般原則、自然哲学や天文学の一般原則、そしておそらく化学や地質学についても、ある程度の知識を持つべきである。哲学や倫理学、論理学で行われてきたことについても、ある程度の認識を持ち、基本的な生理学の知識、そして少なくとも美術史や考古学の知識も持つべきである」^{注54)}と述べている。

生計を立てるために専門分野に直ちに進むことを否定しているわけではないが、ロッジは伝統的 BA 学位を修めたのちに、医学士、理学士などの専門学位を取得することを理想としていた。しかし、地方大学の現実的問題として長期に学ぶ学生は少ないことから、専門教育に幅広い文化の要素を取り入れるよう、カリキュラムの一部として履修を促す規程を作ることを提案している。ロッジは、入学早々、学生が「科学」「人文学」「医学」に分断し、互いにコミュニケーションを取らず、ライバル意識を持つのは不幸なことであり、「大学で学ぶ利点は、多様な知性と接触し、他の多くの分野で学ぶ者たちと社会的に結合」^{注55)}することであると主張している。

技術学校しか出ていない若い技術者も大勢いるし、若い医者で病院にしかいたことのない人はたくさん

いる。同様に、神学校やその他の特別なカリキュラムを学べる狭い場所で教育を受けてきた人たちがいる。大学卒業者の証は、このように狭い分野に限定されることなく、他の学問分野の知識もある程度は学んでいること、そしてあらゆる種類の学生と交流し、その思考様式に精通していることである。このようにして、大学卒業者は、たんに専門的な知識を学んだだけの人と区別されるべきである。この区別を強化することが、私たちの学則の目的たるべきである^{注56)}。

このような文理融合的カリキュラムの主張はどこから生じたのだろうか。一つは、ロッジ自身が受けてきた教育、特に1870年代のロンドン大学のカリキュラムの影響であるが、自叙伝の記述からはロッジがそれほどロンドン大学学位を信奉していることは窺えなかった。むしろ、こうした考え方の背景には、一般大衆を対象とする科学啓蒙家としての著述・講演活動の経験があったのではないかと推察される。

あるいはこの提案は、メイソン科学カレッジ、医学校時代からの古株の教授、カレッジ時代は少数派であった人文学の教授に向けた、統合へのメッセージだったのかもしれない。

このような理由から、私はこの問題をこの早い時期に提起し、然るべきときに同僚たちのコメントを受け取り、このアイデアがどこまで皆の積極的な支持を得られるのかを理解したいと考えている。それなくしては、自由な大学教育の構想に向けたいかなる動きも、ほとんど絶望的なものになってしまうだろう。もし私たちが、このような計画を実行する努力に同意できるのであれば、他のどの大学でも行われていない、あるいは行われたことがないという歴史的な議論には耳を貸さないことにしよう。現在、あらゆる教育の条件は変化したか、変化しつつある。心から同意できる点を除いて、もしも他の大学を模倣しようとするならば、我々の前に広がる壮大な自由を活かすことも、教育の運命に対する自覚を高めることもできないだろう^{注57)}。

ロッジの書簡は、新しい市民大学を作り出すという強い決意で結ばれている。

(3) バーミンガム大学の教育と試験の実際

イングランド初の市民大学として独自の学位試験を執り行うにあたって、大学評議会では真剣な討議が重ねられていた。バーミンガム大学の学士課程 (BA および BSc) の基本的構成は次の通りである^{注58)}。

学士課程は科学の一部コースを除いて3年課程 (3学

表2 1900年バーミンガム大学における学位試験科目

	科目	
録入学登 試験	●英語・英文学・イングランド史(2) ●言語2科目選択* (ラテン語, ギリシア語, フランス語, ドイツ語, 各2) ●数学(2) ●科学1科目選択(力学, 化学, 自然地理学, 植物学, 動物生物学) *人文学, 医学はラテン語必修	
中間学位 試験	BSc	BA
	●純粋数学●物理学●化学●生物基礎	●ラテン語●英語・英文学・イングランド史●純粋数学または論理学●2科目選択うち1科目は現代語選択必修(希, 独, 仏, 伊, 西, 論理学または純粋数学, 物理または自然科学)
最終学位試験	フランス語・ドイツ語の翻訳試験	5科目に出席し, 3科目は2年間履修(主専攻), 2科目は1年間履修(副専攻)
	A 主専攻 = 1科目選択(2年間) 数学(純粋・応用), 物理学, 化学, 地質学, 動物学, 植物学, 生理学, 解剖学, 人類学, 心理学	①古典語・文学(羅・希) ②現代語・文学(仏, 独, 伊・西) ③英文学またはイングランド史(古代・近代)
	B 副専攻 = 2科目選択(1年以上) 純粋数学, 応用数学, 基礎純粋・応用数学, 化学, 地質学, 植物学, 動物学, 生理学, 心理学	④数学または哲学⑤特別科目(①~④までの未選択科目, または, 中間試験で選択していない場合, 論理学, 政治経済, 教育思想史, 物理または自然科学から1科目選択必修)
	B 副専攻 = 1科目選択 物理学, 化学, 地質学, 植物学, 動物学, 生理学, 人類学, 心理学	

(出典: University of Birmingham, *Calendar*, Birmingham, 1900-01)

期)であり, これは他大学と同様である。男女共学, かつ入学要件は16歳以上であった。学士学位の試験科目は表2に示した通りである。主専攻, 副専攻として複数教科を選択するようになっており, 一部を除いて優等学位コースは設定されておらず, 一般教育(general education)が志向されている^{注59)}。この点においては, オックスフォードやケンブリッジではなく, ロンドン大学の学士課程と類似していることが分かるが, 元々, バーミンガム大学の前身であるメイソン・カレッジでは, ロンドン大学の学位取得に向けて学生教育を行っていた。また, 大学昇格後も教員の増員は人文学部, 理学部合わせて4名のみであったので, 教育課程を大幅に変更することは現実的に困難であったと推察される^{注60)}。

バーミンガム大学では, 学位試験のみを行うロンドン大学やヴィクトリア大学とは異なり, 教育を行う大学が単独で試験も実施することになる。そこで, 学位の質を保証するために学外試験委員を含む試験委員会制度が導入された。また, 学位試験を受験するためには, 講義への3分の1以上の出席が必須とされたほか, 学期中の課業(期末試験の成績, 実習・実験ノートの提出)と試験の配点を同等程度にすることが定められた^{注61)}。これは試験の結果のみに偏重するのではなく, 「教育機能を有する大学」として日常の講義や実験を重視する姿勢を示したもののといえる。

学位取得のための講義はかなり多かった。学長ロジはハードワークの信奉者であったが, 学生たちにとって

は大いに不満だったようで, 1911年に学生ギルドが, 学士課程が過密であるとして大学当局に問題提起したほどであった^{注62)}。

大学昇格前後の1886年から1914年までの学生総数及び1901年から1914年までの入学登録をした正規学生とパートタイム学生の推移を図2及び図3に示した。大学昇格後, 明らかに学生数は増加している。市民大学の学生登録に関する資料的な制約からやや正確性を欠くものの, 入学登録をする学生数は増加し1907年度には正規学生数がパートタイム学生数を上回っている。パートタイムの学生数には, ディプロマ取得を目指す教員養成カレッジの学生が含まれている一方, 正規学生のすべてが3年間在籍して学位を取得したわけではなく, 1, 2年在籍したのち大学を去る学生も多数いた。1900年度には学生総数678名中, 正規学生は189名(28%)であったが, 5年後には902名中419名(46%), 10年後には958名中608名(63%)と上昇した^{注63)}。

1901年から1914年までの専攻別学生数と, 学位取得者数の推移をそれぞれ図4及び図5に示した。専攻別学生数には複数学年が含まれるため, 単純に比較することは難しいが, 増加傾向にあることが分かる。

現実には, ロジが構想したような人文学と科学を融合した学位プログラムは実現していない。しかしロジは, 1902年, 郊外の工学系の学科に付随して理系の学科が新キャンパスに移転し, 市中心地の旧建物に取り残される文系の学科との分断が生じることを憂慮し, 新たな

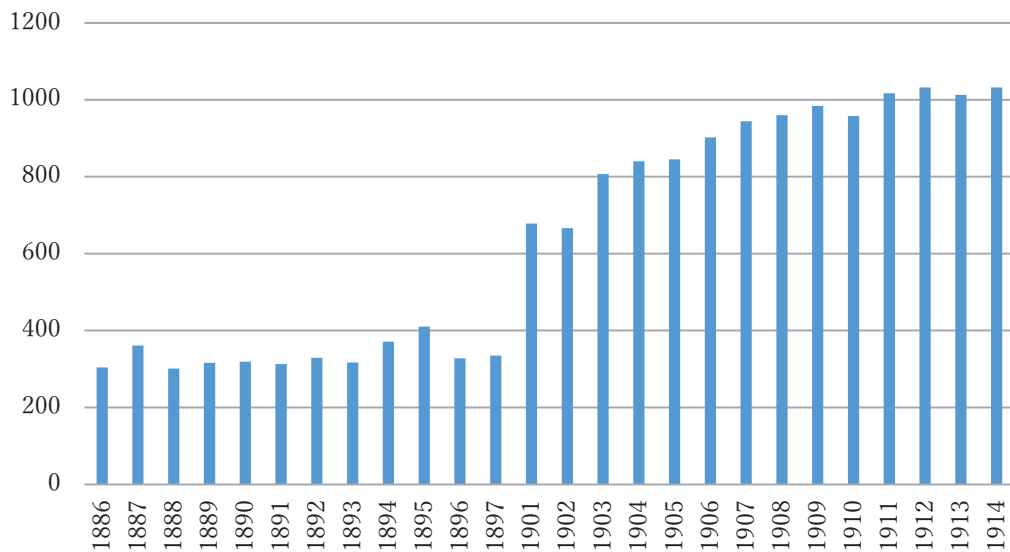


図2 メイソン・カレッジ及びバーミンガム大学 総学生数の推移（1886-1914年）

（出典：Ives et al. 2000, p. 57及び University of Birmingham, Report of the Principal to the Council, 1901-1914より筆者作成）

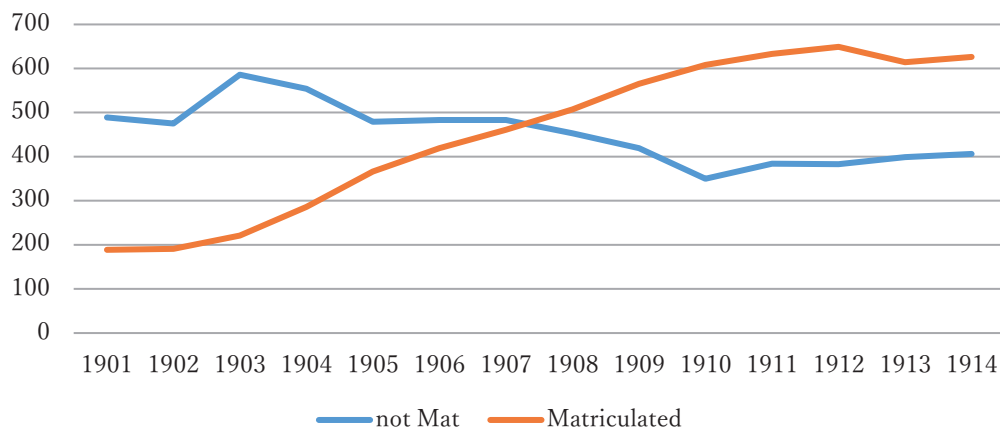


図3 バーミンガム大学学生数の推移（1901-1914年度）

（出典：University of Birmingham, Report of the Principal to the Council, 1901-1914より筆者作成）

建築計画を提案している^{注64)}。こうした考え方は、新キャンパス正面のグレートホール正面の彫像にも現れている。

バーミンガム大学は、醸造学や鉱山学など応用科学分野を発展させ、商学やソーシャルワークに関する学部学科をいち早く新設するなど、ミッドランド地域やその産業に奉仕する大学を標榜していた。そうした試みに対しては「ビールやジャム製造」学位として批判や揶揄する声もあった。ロッジは老練な学長としてのバランス感覚を発揮し、学内に人文学を根付かせることを通じて、大学としての体裁を整えるとともに、理系学部よりも安価な人文学部に、教員志望の学生を集め経営を安定させようとしていたのかもしれない。ロッジは、理事会への年次報

告書において、中等教育の拡大は潜在的な大学入学者の拡大に寄与するだけでなく学位取得を目指す中等教員志望の学生獲得の好機であるとたびたび言及し、理事会に教育学、心理学、歴史学のポストを要求している^{注65)}。

創立当初の大学の歩みは、資金難と学生数の伸び悩みにより順調とは言えなかった。財政難に陥った地方カレッジは共同して国家に補助金を要求する運動を開始し、1899年に最初の地方ユニヴァーシティ・カレッジに対する政府補助金が支給される。これに伴い、政府補助金の配分、適正な用途について調査するため、政府による調査委員会が組織され、各カレッジの財政や教育内容について調査報告書が提出された。政府補助金への依存

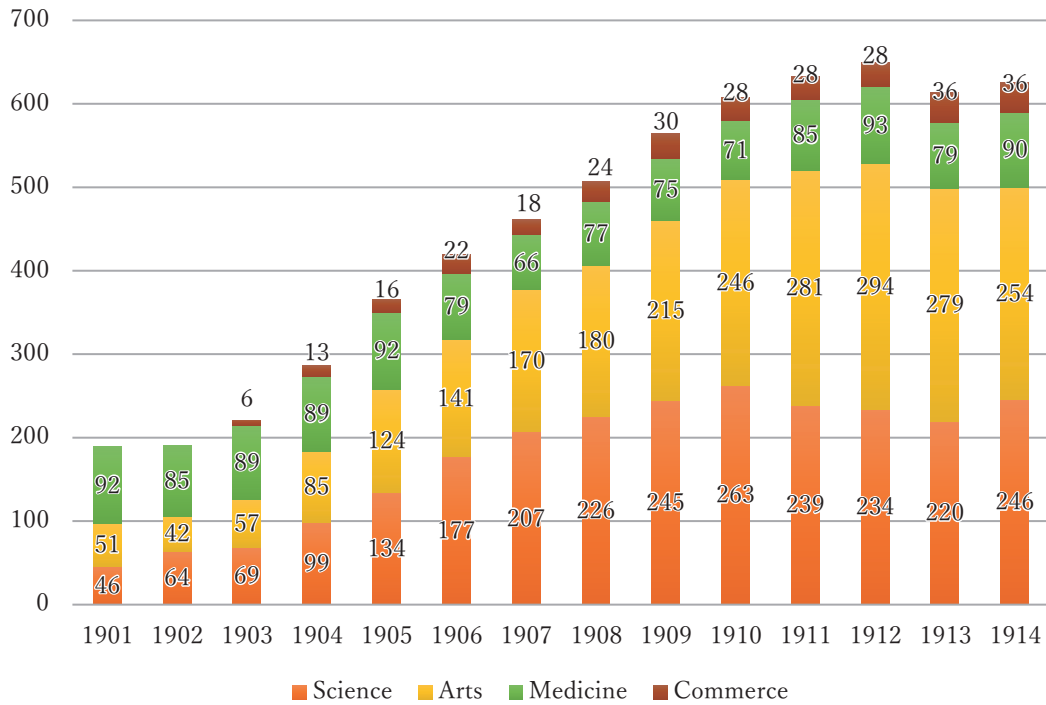


図4 バーミンガム大学 専攻別学生数（1901-1914年）

（出典：University of Birmingham, Report of the Principal to the Council, 1901-1914より筆者作成）

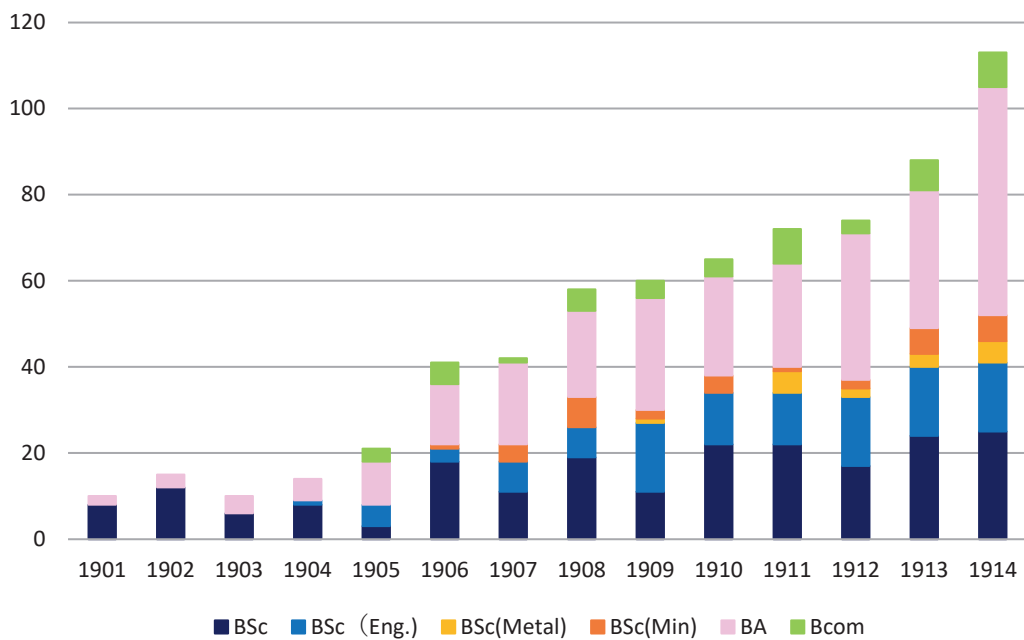


図5 バーミンガム大学学位取得者数の推移（1901-1914年）

（出典：The University of Birmingham, Calendar 1914-15, pp. 673-700より筆者作成）

は、「ナショナルな大学」と「地方に奉仕する市民大学」の理念との間に矛盾を引き起こす可能性を秘めていた。

6. おわりに

ロッジは、初代学長として、創設期のバーミンガム大

学の運営に従事した。もちろん、大学評議会にはユニヴァーシティ・カレッジの時代から所属する古参の教授が存在し、バーミンガム市会の発言力もあったが、ロッジは全国的に著名な科学者、大学人として大学を俯瞰的にとらえ、その方向性に影響を及ぼした。



図6 バーミンガム大学グレートホールの彫像
(ダーウィン, ファラデー, ワット, ニュートン, シェイクスピア, プラトン, ミケランジェロ, ヴァーギル (ウェルギリウス), ベートーベン)
(出典: 筆者撮影)

バーミンガム大学の学士課程においては、教育と試験の二つの機能を併せ持つ大学として、試験の結果のみで学生の合否を決定するのではなく、講義や実験への出席を要件とし、課題や学期中の期末試験を評価に組み込み、学生がどのような教育を受けてきたかという過程を重視した。また、学位の水準を維持するため、試験委員会を設置し、教授だけに試験や採点を任せない体制を作った。地方のユニバーシティ・カレッジが大学に昇格していく過程では、規範的教育機関としてのオックスフォード大学、ケンブリッジ大学の影響がとかく注目されがちであるが、それら大学やパブリック・スクールの同窓ではない大学人も存在したし、ロンドン大学の影響については軽視されてきたといえよう。

科学カレッジを前身として創立されたバーミンガム大学は、地元産業界への貢献を標榜し、応用科学や商学、ソーシャルワークなど新分野を積極的に取り入れたが、一方でロッジは科学と人文の分断を憂慮し、すべての学生がその時代の共通の文化を学ぶことを大学の意義として重視した。学問の専門分化や敵愾心に対抗し、社会的結合を促進する姿勢は学内に共有され、キャンパスの設計やグレートホール正面の彫像に象徴されている。1880年、メイソン科学カレッジ開学記念講演として、ハクスリは「教養としての自然科学」を提唱したが、その20年後、ロッジは科学や技術中心の新大学で「教養としての人文」を訴えたのである。

謝辞

本研究は2021年度広島女学院大学学術研究助成ならびにJSPS 科研費 JP22K02246の助成を受けたものです。

注

- 1) 中村勝美「イングランドの大学における連合性原理に関する歴史的考察」『広島女学院大学人間生活学部紀要』第2号, 2015年, 74-75頁。
- 2) 中村勝美「イギリスにおける市民大学の誕生と学士課程教育の理念—バーミンガム大学の成立過程を中心に—」『広島女学院大学人間生活学部紀要』第3号, 2016年, 41頁。
- 3) カートイスは、同時期のオックスフォード大学の学位試験の合格率について、「ほとんど落第者がいないという驚異的な合格率の高さ」であったと指摘し、その要因としてチュートリアルと呼ばれる個人指導により、チューターが学生の学習の進度や理解度をきめ細かく把握できたからだとしている。M. カートイス, 中村勝美訳「19世紀オックスフォード大学における試験, 教養教育, チュートリアル制度」『大学史研究』第24号, 2010年, 103頁。
- 4) Parliamentary Papers, *Report of Royal Commission to Inquire Whether Any and What Kind of Powers is or are Required for the Advancement of Higher Education in London*, 1889. Appendix no. 17.
- 5) 中村, 前掲, 2016年。
- 6) Drummond, 'Lodge in Birmingham Pure and Applied Science in the New University, 1900-1914' in Mussell J. and Gooday, G. *Pioneer of Connection Recovering the Life and Work of Oliver Lodge* (University of Pittsburgh Press. Kindle 2020)。
- 7) Ibid.
- 8) University of Birmingham. Letter to the Senate and Staff From the Principal, July, 1900. UC/7/iv/4 University of Birmingham Archives, the Cadbury Research Library.
- 9) Lodge, O., *Past Years: An Autobiography* (Cambridge Library Collection Physical Sciences, 2012), First Published in 1931.
- 10) 小山静子・太田素子編著『「育つ・学ぶ」の社会史—「自叙伝」から』藤原書店, 2008年, 14-15頁。
- 11) Past Years, p. 5.
- 12) ロッジには W. P. Jolly による伝記 *Sir Oliver Lodge* (1974) がある。
- 13) P. Rowlands, Lodge, Sir Oliver Joseph (1851-1940), DNB, 2004, <https://doi.org/10.1093/refodnb/34583>.
- 14) J. A. Fleming, "Obituary Sir Oliver Lodge, F. R. S.", *Nature* 146, 3697, 1940.
- 15) R. A. Gregory and Allan Ferguson, "Oliver Joseph Lodge (1851-1940)," *Obituary Notices of Fellows of the Royal Society* 3 (1941): 559.
- 16) 岡本正志「英国における O. Lodge 資料について」『徳島科学史雑誌』16号, 1997年, 59頁。
- 17) J. Mussell, and G. A. Gooday, p. 40.
- 18) Lodge, *ibid.*, p. 34.
- 19) Ibid., p. 36.

- 20) Ibid., p. 38.
- 21) Ibid., p. 40.
- 22) Ibid., p. 45.
- 23) Ibid., p. 50.
- 24) Ibid., p. 46.
- 25) Ibid., p. 46–47.
- 26) Ibid., p. 47.
- 27) Ibid., p. 51.
- 28) Ibid.
- 29) Ibid., p. 52.
- 30) Ibid., p. 65–66.
- 31) 市民の寄付により設立されたアーツ・サイエンスの教育機関、図書館も設置されていた。
- 32) Ibid., p. 68.
- 33) Ibid., p. 68–69.
- 34) Ibid., p. 73.
- 35) Mussell J. and Gooday, G., p. 19.
- 36) Lodge, p. 88.
- 37) Ibid., p. 81.
- 38) Ibid., p. 82.
- 39) Ibid., p. 133.
- 40) Ibid., p. 82.
- 41) Ibid., p. 83.
- 42) Ibid., p. 133.
- 43) Ibid., p. 88.
- 44) Ibid., p. 318.
- 45) Ibid., p. 319.
- 46) University of Birmingham, Income and Expenditure Accounts and Balance Sheet, 1902, 1910.
- 47) Ibid., p. 88.
- 48) Ibid., p. 89.
- 49) Ibid.
- 50) University of Birmingham. Letter to the Senate and Staff from the Principal, July, 1900. UC/7/iv/4 University of Birmingham Archives, the Cadbury Research Library, p. 2.
- 51) Ibid., p. 3.
- 52) Ibid.
- 53) Ibid., p. 8.
- 54) Ibid., p. 9.
- 55) Ibid.
- 56) Ibid., p. 10.
- 57) Ibid., p. 11.
- 58) University of Birmingham, *Calendar 1900-01*, Birmingham, 1900.
- 59) ごく少数ではあるが1920年代までは優等学位の代わりに3年で修士学位を取得することができた。
- 60) University of Birmingham, *Calendar 1900-01*, Birmingham, 1900.
- 61) Ibid.
- 62) Eric Ives, Diane Drummond, Leonard Schwarz, *The First Civic University: Birmingham 1880–1980 An Introductory History* (The University of Birmingham Press, 2000), p. 238–239.
- 63) Ibid. p. 151.
- 64) G. Gooday and S. Arapostathis, Electrical technoscience and physics in transition, 1880–1920, *Studies in History and Philosophy of Science*, 44, 2013, pp. 202–211.
- 65) University of Birmingham, Report of the Principal to the Council. 1901–1902, p. 4–5

引用文献

- 1) マーティン・J・ウィーナ（原剛訳）：英国産業精神の衰退—文化史的接近，勁草書房，pp. 1–333，勁草書房，1984
- 2) B・バーンステイン（萩原元昭編訳）：言語社会化論，pp. 1–280，明治図書出版，1981
- 3) マイケル・ヤング（窪田鎮夫・山元卯一郎訳）：メリトクラシー，pp. 1–250，至誠堂，1982
- 4) 山崎智子：イギリス大学制度成立史—国家と大学のダイナミズム，pp. 1–240，東信堂，2021
- 5) アイヴァー・F・グッドソン（藤井泰・山田浩之編訳）：教師のライフヒストリー—「実践」から「生活」の研究へ，pp. 1–209，晃洋書房，2001